

琴線 令和六年

森野 水琴

このごろは 人の心も 和らぎて
ともに遊ばむ 時のまにまに

風薫る 春の訪れ 愛でながら
あふれる想い したためるらむ

庭見れば 花咲き誇り あげは舞う
のどけき日々に 心和まむ

咲くまでの 期待ふくらむ つぼみ見て
今か今かと 日も暮れるらむ

夜がふけて 風がささやく 言の葉に
月の光が 降りてくるかな

風薫る そよぐ言の葉 ことほげば
ほほえみながら 心和まむ

雨の音 止みて明けたる 空見れば
虹の架け橋 光り輝く

風薫る 花の都に あてやかな
競いし者の 夢叶うらむ

見上げれば またたく星の かなたより
贈られしもの 心に沁みる

いくたびも 体に傷を 受けるとも
心磨いて 立ち直るらむ

たおやかに さらに和らぐ 言の葉が
今ひとたびと 包み込むかな

やまとうた 森にも野にも ひびかせて
水がかなでる 琴となりけり

言の葉に 月の光が ほほえみて
内から磨く 光とならむ

風薫る きんもくせいを 運びつつ
実りの秋を 知らしめるらむ

さてもこの 神無月に 天に召される 人の残した
恵みをみなで 育みたまえ

風薫る 友を天へと いざないて
残れる人を 我は育てむ

倉の戸を 開けてまばゆい 光浴び
見上げる空に 虹の架け橋

言の葉に 月の光を 受けながら
つどいし者が ふみ したためむ

待ち焦がれ 訪ねし海は 夕暮れの
赤と黒とに 波が泣くらむ